

# れいわ 令和6（2024）年度「歳時記」

あ き おおたちょうきょういくいいんかい きょういくちょう おおの まさと  
安芸太田町教育委員会 教育長 大野 正人

がつ  
\*6月

わたし もとちゅうがっこう こくごきょういん  
私は元中学校の国語教員です。そこでその経験を生かして、町民の皆さんに、  
こてん まいつきすこ しょうかい かんが だい かいめ こんげつ しょうがっこう  
古典を毎月少しずつ紹介していきたいと考えています。第1回目の今日は、小学校  
ちゅうがっこう きょうかしよ て まくらのそうし だいいちだん いんよう  
や中学校の教科書にも出てくる「枕草子」第一段からの引用です。

こぶん  
<古文>

なつ よる つき  
夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ  
ひと ふた  
一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。あめなどふるもをかし。

げんだいごやく  
<現代語訳>

なつ よる  
夏は夜がすばらしい。月が出ているときはいうまでもないが、月の出ない夜でもやは  
り、蛍がたくさん飛んでいるのはいいものだ。また、たった一、二匹だけが、かす  
かに光りながら飛んでいくのも趣がある。

あ き おおたちょう こ  
安芸太田町に越してきて2か月半が経ちました。「太田川ではたくさんの蛍が飛び  
か うつく 美しいので是非観に行ってくださいね。」というお話をよくいただきます。  
わたしじしん でんえんちたい がっこう つとめ おがわ ようすいろ  
私自身、田園地帯の学校に勤めていたころ、小川や用水路などで、蛍が「ただ一つ  
ふた  
二つなど、ほのかにうち光りて行く」光景に出会うことは何度かありました。けれど  
も、テレビや写真以外で「蛍の多く飛びちがひたる」というシーンにお目にかかった  
ことはありませんので、今シーズンはそれが実現するというこでわくわくしていま  
す。

まいつきすこ かんたん こてん おも  
というように、毎月少しずつ簡単な古典にふれていきたいと思ひます。おとなの皆  
さんはもちろんのこと、まだ古典を学習したことのないこどもの皆さんも、毎月の  
さいじき  
「歳時記」にチャレンジしてみてください。

## ＊7月<sup>がつ</sup>

今月の歳時記は、雨と川を題材としています。出典は、<sup>ちゅうがっこう きょうかしよ</sup>中学校の教科書にも出てくる「<sup>みち</sup>おくのほそ道」です。「<sup>みち</sup>おくのほそ道」は、<sup>まつおばしやう さくひん</sup>松尾芭蕉の作品で1694年ごろに成立したとされています。

### <古文>

<sup>もがみがわ みちのく い</sup>最上川は陸奥より出でて、<sup>やまがた みなかみ</sup>山形を水上とす。<sup>こてん はやぶさ</sup>暮点・隼などいふおそろしき難所あり。<sup>いたじきやま きた なが</sup>板敷山の北を流れて、<sup>さかた うみ い</sup>はては酒田の海に入る。<sup>さゆうやまおおい しげ なか らね くだ</sup>左右山覆ひ、茂みの中に舟を下す。これに<sup>いね</sup>稲つみたるをやいな舟といふならし。<sup>しらいと たき あおば ひまひま お</sup>白糸の滝は青葉の隙々に落ちて、<sup>せんにとんどう</sup>仙人堂岸に<sup>きし のぞ</sup>臨みて立つ。<sup>た みず</sup>水みなぎって舟あやふし。

<sup>さみだれ</sup>五月雨をあつめて<sup>はや もがみがわ</sup>早し最上川

### <現代語（口語）訳>

<sup>もがみがわ みちのく なが</sup>最上川は、<sup>で</sup>陸奥から流れ出て、<sup>やまがた じやうりゆう</sup>山形を上流としている。<sup>こてん はやぶさ</sup>暮点・隼などという恐ろしい難所がある。<sup>いたじきやま きたがわ なが</sup>板敷山の北側を流れて、<sup>さいご さかた うみ はい</sup>最後には酒田の海に入って行く。<sup>さゆう</sup>左右を<sup>やま おお</sup>山に覆われ、<sup>しげ なか らね</sup>茂みの中に舟を流す。<sup>なが</sup>この舟に<sup>らね いね つ</sup>稲を積んだものを、「いな舟」と呼ぶらしい。<sup>しらいと たき あおば</sup>白糸の滝は青葉のすき間すき間に流れ落ちており、<sup>せんにとんどう きし のぞ</sup>仙人堂は岸に臨んで立っている。<sup>た</sup>水の<sup>みず いきお</sup>勢いが強く、<sup>つよ らね あや</sup>舟が危うくなることがあった。

<sup>ふ</sup>降り続いた五月雨を集めて、<sup>もがみがわ げきりゆう</sup>最上川は激流となって流れることよ。

<sup>えが</sup>ここで描かれている、<sup>もがみがわ やまがたけん</sup>最上川は山形県を流れる一級河川で、<sup>いっきゆうかせん</sup>酒田市で日本海に注いでいます。<sup>ほんちやう おおたがわ</sup>本町にも太田川が流れています。<sup>おおたがわ はつかいちし</sup>太田川は廿日市市の冠山を源流とし、<sup>しはきがわ つつががわ</sup>柴木川、筒賀川、<sup>たきやまがわ</sup>滝山川などが<sup>ごうりゆう</sup>合流して<sup>ひろしまし</sup>広島市に至り、<sup>いた</sup>その後は<sup>ご</sup>分流して、<sup>ふんりゆう</sup>広島<sup>ひろしま</sup>デルタを形成し<sup>る</sup>瀬戸内海に注いでいます。

<sup>わたし おおたがわ</sup>私は、太田川を見ながら<sup>み</sup>毎日通勤しています。<sup>まいにちつうきん</sup>普段は、<sup>ふだん すいりゆう</sup>水量も少なく<sup>すく</sup>穏やかな川ですが、<sup>おだ</sup>ひとたび<sup>かわ</sup>上流で大雨が降ると、川の様子は大きく変わります。<sup>じやうりゆう おおあめ</sup>300年の時を超えて、<sup>ふ</sup>芭蕉と<sup>かわ</sup>安芸太田町の<sup>ようす</sup>私たちは、<sup>おお</sup>山形と<sup>か</sup>広島それぞれの地で、<sup>ねん</sup>同じような<sup>とき</sup>光景を<sup>こ</sup>目にしているのかもしれない。<sup>かんが</sup>そう考えると、「<sup>みち</sup>おくのほそ道」にも何か<sup>なに</sup>親近感がわいてきます。<sup>しんきんかん</sup>

## ＊ 8月

「安芸太田町教育大綱」が2年の時を経て完成を迎えました。教育大綱では、本町教育の方向性として、「なんでも学び、遊びも学び」「好奇心を刺激する学び」「力を合わせ共に育つ学び」「町民が参加する学び」の4つが示されています。今月の「歳時記」ではこのうち「好奇心を刺激する学び」にまつわる古典を紹介します。

### ＜古文＞

今は昔、唐に、孔子、道を行き給ふに、八つばかりなる童あひぬ。孔子に問ひ申すやう、「日の入る所と洛陽と、いづれか遠き。」と。孔子いらへ給ふやう、「日の入る所は遠し。洛陽は近し」。童の申すやう、「日の出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所は近し。洛陽は遠しと思ふ。」と申しければ、孔子、かしこき童なりと感じ給ひける。「孔子にはかく物問ひかくる人もなきに、かく問ひけるは、ただ者にはあらぬなりけり。」とぞ人いひける。

### ＜現代語（口語）訳＞

今となつては昔のことだが、中国で孔子が道を歩いていざつと、八歳ぐらいのこどもと出会つた。そのこどもが孔子に尋ねて言うには、「日の入る所と洛陽とはどちらが遠いか。」と。それに対して孔子がお答えになる、「日の入る所は遠い。洛陽は近い。」と。こどもが、「日の出たり入つたりするところは見える。洛陽はまだ見たことがない。だから日の出る所は近く、洛陽は遠いと思う。」と言つたので、孔子は賢いこどもだとお感じになつた。「孔子に対してこのようにものを尋ねて聞く人もいないのに、このように尋ねたのは、そのこどもはただ者ではなかつたのだ。」と人々は言い合つたということだ。

出典は「宇治拾遺物語」です。この話は、ひとりの「こども」が恐れることなく、有名な先生である「孔子」に質問し、「孔子」が答へたことに對しても自分の考えを述べ返したというものです。好奇心を持って自分の意見を表明することができた「こども」が素晴らしいと称えられるのもしかたありませんが、その意見をしっかりと受け止め、尊重した「孔子」の心の広さに私は感動を覚えます。

「こども基本法」や「こども大綱」によって、こどもの意見が尊重され、社会に反映される重要性が国によって示されています。安芸太田町教育委員会でも、「こども」の意見表明と尊重、さらには教育施策への反映に努めていきます。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

暑い日が続いています。皆さん、どうぞご自愛ください。

## ＊ 9月

今月の「歳時記」は、まさに九月という言葉で始まります。ただし、この九月は旧暦ですから、今の暦に当てはめると十月ごろということになり、少し季節感としてはずれるのかもしれませんが。

### <古文>

九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の、今朝はやみて、朝日いとけざやかにさし出でたるに、前裁の露は、こぼるばかり濡れかかりたるも、いとをかし。透垣の羅文、軒のうへなどは、かいたる蜘蛛の巢の、こぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。

少し白たけぬれば、萩などの、いと重げなるに、露の落つるに枝のうち動きて、人も手ふれぬに、ふとうへさまへあがりたるも、いみじうをかしと言ひたることどもの、人の心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。

### <現代語訳（口語訳）>

九月ごろ、一晩中明け方まで降り続いた雨が、今朝はやんで、朝日がとても際立って差し始めたときに、庭に植えた草木の露が、こぼれ落ちるほど濡れかかっているのも、とても趣があります。透垣の羅文や軒の上などに、かけた蜘蛛の巣で、破れ残っているものに、雨のかかっているのが、白い玉を貫いているようであるのが、とても風情があって趣深いです。

少し白が高くなると、萩などで、とても重そうであるものに、露が落ちると枝が揺れ動いて、人も手を触れないのに、急に上の方へ跳ね上がったのも、とても趣がありますと言ったことなどが、他の人の心には、少しも趣深くないのだろうと思うことが、また趣があります。

「枕草子」第二百五段からの出典です。「枕草子」をここで取り上げるのは2回目です。作者の清少納言は、今年のNHK大河ドラマでも主人公の紫式部に並ぶ存在として取り上げられています。「枕草子」は古文の中では比較的簡単な文章ということで、小学校や中学校の教科書でも取り上げられることが多い作品の一つです。

この第百二十五段が描く景色は、小さくて色も薄いものです。背景としての前栽や透垣、羅文は目にすることは少ないですが、それでも朝日と蜘蛛の巣や露が織りなす光景は現代にも通じるものとなっていて、こどもからおとなまでだれでも簡単に想像することができるのではないのでしょうか。

清少納言は、「いみじうをかしと言ひたることどもの、人の心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。(とても趣がありますと言ったことなどが、他の人の心には、少しも趣深くないのだろうと思うことが、また趣があるのです。)」と皮肉っぽく表現していますが、皆さんはいかがでしょう。

清少納言さん、「昭和生まれの私もあなたが見た光景を、『いとをかし(とても趣がある)』と感じていますよ。素晴らしい感性ですね。」と伝えたいと思うのは私だけでしょうか。

## ＊10月がつ

旧暦きゅうれき10月がつは、全国ぜんこくの八百万やおよろずの神々かみがみが出雲いすもの国くにに集まるあつ月つきとされています。したがって他の土地ほかとちでは神様かみさまが留守るすになるので「神無月かんなつき」と呼ばれるということです。神々かみがみが集う出雲いすもの各神社かくしんじやでは「神迎祭かみむかえさい」、「神在祭かみありさい」そして、全国ぜんこくに神々かみがみをお見送りみおくする「神等去出祭からさでさい」が行おこなわれるそうです。

そこで、今月こんげつの古典こてんは10月がつの月つきの名な「神無月かんなつき」から始まる作品はしを選びました。

### <古文>

神無月かんなつきのころ、栗栖野くるすのといふ所うところを過ぎて、ある山里やまざとに尋ね入たする事侍りいしに、遥ことはへかななる苔はるの細道こげを踏み分けて、心細く住いおりみなしたる庵こあり。木の葉こに埋もるう懸樋かけいのしづくならでは、つゆおとなのういものなし。閼伽棚あかたなに菊きく・紅葉ちみじなど折おり散ちらしたる、さすがに住すむ人ひとのあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るわほどに、かなたの庭にわに、大きなこうじ柑子の木きの、枝えだもたわわになりたるが、周まわりをきびしく囲かこひたりしこそ、少すこしことさめて、この木きなからましかばと覚おぼえしか。

### <現代語訳（口語訳）>

旧暦きゅうれき10月がつごろ、京都きょうとの栗栖野くるすのという所ところを過ぎて、ある山里やまざとに人ひとを訪ねて入たすることがありましたが、遠くまで続つづいている苔こげの細道ほそみちを踏み分けて行くと、さびしい様子ようすでひっそりと住すんでいる草庵そうあんがある。木の葉こで覆おおわれた懸樋かけいから落ちるしづくのほかには、まったく音おとを立てるものがない。閼伽棚あかたなに菊きくや紅葉ちみじが折おって散ちらばせて生いけてあるのは、そうはいつでも住すむ人ひとがいるからなのだろう。こんな様子ようすでも住すんでいることができるのだな、としみじみと見みていると、向むここの庭にわに、大きなおお柑子の木みかんで、枝えだがしなうほど実みがなっているのがあって、その周まわりを厳重げんじゅうに囲かこっていたのには、少すこし興きようざめして、この木きがなければよかったのにとおもった。

兼好法師けんこうほうしきく作「徒然草つれづれぐさ」第11段だいです。ご存ぞんじの方も多たいことでしょう。教科書きょうかしょや試験しけんなどで見みたという高校生こうこうせいやおとなの方も少すくなくないでしょう。

この作品は、兼好けんこうが好ましく思おもう閑寂かんせいな庵いおりに對し、物欲ぶつよく的てきなみかんの木きが對照たいしょうを  
なしています。兼好けんこうは、「少すこしことさめて（少すこし興きょうざめして）」と書かいていますが、皆みな  
さんはどのように感かんじられているでしょうか。私わたしは、「人間にんげん味みがあつておもしろいな。  
隠者いんじゃが隠者いんじゃに徹てつするのもいいが、隠者いんじゃの中なかに俗人ぞくじんが見みえ隠れするのかくもまたいいな。」  
としみじみ感かんじています。

文学ぶんがくに關かかわらず、生活せいかつのあらゆる場ば面めんで、相手あいてを尊そん重ちようし、自分じぶんらしく物事ものごとを考かんがえ  
ていければいいですね。

が  
\*11月

11月は「文化」の月です。3日は「文化の日」に制定され、皇居では秋の叙勲が行われます。また、全国の保育所やこども園、小学校、中学校などで、生活発表会、音楽会や文化祭などの文化の祭典が催されます。本町でも、3日に中学校合同文化祭が開かれます。また、9日には筒賀小学校・保育所と戸河内小学校が学習発表会を、五サー市で加計小学校5・6年生がマーチング発表を行います。さらに、16日には認定こども園とごうち、修道保育所が生活発表会を実施します。安芸太田町の11月は「文化」で彩られます。そこで今月の歳時記は「文化」の一つ「音楽」を取り上げます。

こぶん  
<古文>

博雅三位の家に、盗人入りたりけり。三位、板敷きの下に逃げかくれにけり。盗人帰り、さて後、はひ出でて家中を見るに、残りたる物なく、みな取りてけり。筆簞一つを置物厨子に残したりけるを、三位取りて吹かれたりけるを、出でて去りぬる盗人、はるかにこれを聴きて、感情おさへがたくして、帰り来たりていふやう、「ただ今の御筆簞の音をうけたまはるに、あはれにたふとく候ひて、悪心みな改まりぬ。取るところの物どもことごとくに返したてまつるべし。」といひて、みな置きて出でにけり。昔の盗人は、またかく優なる心もありけり。

げんだいごやく (こうごやく)  
<現代語訳 (口語訳)>

博雅三位の家に、盗人が入った。三位は、板の間の下に逃げ込んで隠れていた。盗人が帰り、その後、はい出て家の中を見ると、残っているものはなく、みな取っていた。筆簞一つだけを置き物用の棚に残してあったのを、博雅三位が手にとってお吹きになったところ、立ち去った盗人が、はるか遠くでこれを聴き、感情が抑えられなくなつて、戻ってきて言うには、「たった今お吹きになった筆簞の音色を拝聴していると、しみじみとした気持ちになり、尊く思われまして、悪心がすっかりなくなりました。盗んだ品物をそっくり全部お返し致しましょう。」と言って、全て置いて、出ていっ

た。昔の盗人には、またこのような優美な心もあったのである。

出典は、橘成季の編集により13世紀半ばに成立したとされる「古今著聞集」  
です。世俗説話ですので事の真偽はわかりませんが、「音楽」を始めとする「芸術」  
「文化」には人の心を揺さぶる大きな力があると私は強く感じています。

安芸太田町の皆さんには、「芸術」「文化」の大きな力を、「文化」の月である11  
月に感じていただければと幸いです。こども園・保育所、小学校、中学校で、地域の  
皆さんのお越しをお待ちしています。

## ＊12月

今月は、「土佐日記」の冒頭を取り上げました。「土佐日記」は、「古今和歌集」の撰者としても有名な紀貫之の作品です。今の高知県知事にあたる土佐守の任を終えて、京へ帰る旅を綴った日記です。仮名で書かれた最初の日記で、女性が書いたという設定を用いて、在任中に女兒をなくした悲しみが綴られています。「土佐日記」は日記文学という新たな分野を創造し、後に続く女流文学の発展を促すことになりました。

### <古文>

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

その年の師走の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。そのよし、いささかにもに書きつく。

ある人、県の四年五年果てて、例のことどもみなし終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろ、よくくらべつる人々なむ、別れ難く思ひて、日しきりにとかくしつつ、ののしるうちに、夜更けぬ。

### <現代語（口語）訳>

男も書くという日記というものを、女の私もしてみようと思って書くのである。

ある年の十二月二十一日、午後八時ごろに出発する。その旅のことを、ほんの少し書きつける。

ある人が、国司としての四、五年の勤めが終わり、決まりごととなっていることをすべて終えて、解由状などを受け取り、住んでいる館から出発して、船に乗ることになっている場所へと移る。あの人この人、知っている人も知らない人も、見送りをする。ここ数年、親しく付き合ってきた人たちは、別れづらく思っ、一日中絶えずあれこれしながら、騒いでいるうちに、夜がふけてしまった。

平安時代の貴族の生活や心情を垣間見ることができる文章です。「男もすなる

日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」という書き出しは印象的で、高校の授業でこの表現に触れて以来、私の心にずっと残っています。

ところで、皆さんは「日記」を書いていらっしゃるでしょうか。実は、私は書いています。ただし紙に書いているのではありません。個人的にホームページを立ち上げ、そこに「心にうつりゆくよしなしごと」を記しています。「それなら、私もSNSで発信していますよ。」という方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。スマートフォンの隆盛により活字離れが進んでいると揶揄されることも多いですが、逆にSNSをつうじて文字や画像などによる表現活動が進んでいると考えることもできるのではないのでしょうか。

紙派、SNS派、他にもスタイルがあるのかもしれませんが。いずれにせよ、皆さん。世界に一つだけの「〇〇日記」で自分らしさを表現してみたいかがでしよう。

＊ 1月

謹んで新春のお慶びを申し上げます

旧年中は大変お世話になりました

本年もよろしくお願い申し上げます

今月は、新年らしい作品を「万葉集」から選びました。ご存じのとおり「万葉集」は、奈良時代とそれ以前の和歌等を集めた現存する最古の歌集です。作者は天皇から農民にいたるまで、全国の各階層にわたっています。歌風はおおらかで感情を素直にうたう「万葉調」と言われています。

<古文>

新しき 年の始めの 初春の 今日降る雪の いや重け吉事 … (1)

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く尊き  
駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば  
渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず  
白雲も い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける

語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は … (2)

<現代語(口語)訳>

新年のはじめの今日、めでたく降る雪のように、ますますよいことが重なってほしいものだ。 … (1)

天と地が分かれた時から、神々しくて高く尊い駿河の富士の高嶺を、天空に振り仰いで遠く見やると、大空を渡る太陽の光も隠れ、照る月の光も見えず、白雲も山にはばまれて行きとどこおり、雪は常に降っている。この神々しい富士の高嶺はいつまでも語り伝え、言い継いで行こう。

… (2)

(1) は、まさに新春の和歌、大伴家持の作品です。実はこの作品は、藤原氏の前  
に衰えていく一族を案じながら詠まれたものだとされています。(2) は、「一富士  
二鷹三茄子」と初夢に見ると縁起が良いものの一番としてあげられている「富士山」  
を詠んだ作品ということで選びました。山部赤人が作者です。

万葉集の成立は759年頃とされているので、これらのうたは少なくとも1200年  
以上も前に詠まれたものとなります。それでもどうでしょう。年の始めの人々の心情  
や富士山への思いは現代を生きる私たちと何ら変わりがないことが、これらの作品  
から伝わってくるのです。新年を祝う行事が世界各地で行われ、また富士山が世界  
遺産に認定されたことから分かる通り、これらの作品にかけた作者の思いは、時  
を越えたグローバルなものと言えるでしょう。

新しい年、令和7(2025)年が、素晴らしい一年になりますよう、心からお祈  
り申し上げます。

## ＊2月

いちがつようか とおか みっかかん つうきんろ ゆき おお このか とおか  
1月8日から10日までの3日間、通勤路は雪に覆われていました。9日から10日  
にかけて雪はしんしんと降り続けました。除雪作業も行われています。昨年3月まで  
ゆき ふ つづ じよせつさぎよう おこな さくねん がつ  
住んでいた神戸市北区も毎年積雪があり、冬用タイヤは必須アイテムでしたが、この  
す こうべしきたく まいとせきせつ ふゆよう ひっす  
ように連続して何日も雪道を走るという経験は私にはありませんでした。驚いたの  
れんぞく なんにち ゆきみち はし けいけん わたし おどろ  
は、雪の多さもさることながら、この町の人々の普段と変わらぬ生活の姿です。朝早  
ゆき おお まち ひとひと ふだん か せいかつ すがた あさはや  
く起きて、雪かきをして、いつも通りに出勤する。こどもたちも雪の中、遅れずに  
お ゆき おお ども しゅっきん ゆき なか おく  
登校する。公共交通も店舗の営業も日常と何ら変わりありません。安芸太田町に暮  
とうこう こうきょうこうつう てんぽ えいぎょう にちじょう なん か あき おおたちょう く  
らす人々の逞しさに感動を覚えています。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、今月は「雪」をテーマにした作品を紹介  
まえお なが こんげつ ゆき さくひん しょう  
介します。

### <古文>

ゆき たこ ふ 降りたるを、例ならずして御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語  
ものごたり  
などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、  
ろ う しょうなごん こうろほう ゆき ん おお  
御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

ひとひと こと し うた など に さへ 歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この  
みや ひと  
宮の人にはさべきなめり。」と言ふ。

### <現代語（口語）訳>

ゆき たか ふ 降り積もったのに、いつもとは違って格子を下ろしたまま、炭櫃  
すびつ ひ  
に火を起こして、世間話などして集まっていたときに、「少納言よ、香炉峰の雪はどの  
ひ お せけんばなし あつ しょうなごん こうろほう ゆき  
ようでしょう。」と（中宮定子様が）おっしゃったので、格子を挙げさせて、すだれ  
ちゅうぐうていしさま こうし あ  
を高く巻き上げたところ、お笑いになる。

ひとひと こと こうろほう ゆき はなし し わか などにも詠むけれども、  
よ  
おも 思いつきもしませんでした。やはり、宮中にお仕えする人としてふさわしいようだ  
きゅうちゅう つか ひと  
と言う。

しゅってん まくらのそうし だい だん さくひん み こうろほう ゆき  
出典は、「枕草子」第280段です。この作品の見どころは、「香炉峰の雪」につ

いてのやり取りです。「香炉峰」は中宮定子や清少納言が住んだ京都の山ではありません。この作品の背景には、「香炉峰の雪は簾を撥げて看る」という白居易の漢詩があります。雪景色を見たいと思った中宮定子は、この一節を踏まえて試したのですが、清少納言は中宮定子の意図を察知して、実際にすだれを巻き上げるという機転を利かせることで中宮定子を満足させたのです。清少納言にとっても一世一代の自慢話であったことでしょう。このような会話のやり取りができると素敵ですね。

2月如月、雪も多く、大変な時期ですが、「風流」の心を忘れず穏やかに過ごしていければと思います。

## \* 3月

今冬は、雪も多く、寒い日が続きました。3月、いよいよ春の到来です。そこで、今回は春を感じさせる和歌を紹介しします。

### <古文>

- (1) 君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ 光孝天皇
- (2) 人はいさ心も知らずふるさととは花ぞ昔の香にほひける 紀貫之
- (3) 山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水 式子内親王

### <現代語（口語）訳>

- (1) あなたにさしあげようと思って春の野に出て若菜をつむ私の袖に、雪がしきりに降りかかる。
- (2) さあ、人の心はわからないが、昔なじみのこの里では、梅の花だけは昔と変わらぬよい香りで咲いているよ。
- (3) 山が深くて春の訪れも知らずにいた庵の松の戸に、とぎれとぎれに落ちかかる雪解けの美しいしずくよ。

(1)(2)は古今和歌集、(3)は新古今和歌集からの出典です。古今和歌集は、日本最初の勅撰和歌集で905年頃に成立しています。万葉集ののち、平安時代には漢詩文が盛んになり、和歌は廃れていました。そんな中、仮名文字の普及とともに、国風文化を重視しようという動きが起こり、和歌が見直されます。そんな時代に誕生したのが古今和歌集です。一方、新古今和歌集は、1205年に成立しています。武士が台頭するに世の中であって、和歌に情熱を傾けた後鳥羽上皇のもとに優れた歌人が集まり、和歌の行事がしばしば催されました。後鳥羽上皇の命によって編集されたのが新古今和歌集です。安芸太田町では、(1)(2)(3)ともよく似た光景に出会えそうですね。皆さんは、まだ寒さが残る3月にどのようにして春を感じられるのでしょうか。